禪の近代化に就て

古田紹欽

南無阿彌陀佛と云ひ、南無釋迦佛と云ひ、南無妙法蓮華經と云ひ、その名號、唱題を耳にする時、今日我々はどんな心持を感ずることであらうか。如何にも時代錯誤の陳腐なものとしか受取れないのではあるまいか。一體これはどうしたことか。

飜つて禪を顧みる時これまたどうしたことであらう。徒に無と說き空と說き、或は亂りに棒喝を行じ、型通りの拈坐か、固定した公案の閑工夫あるのみである。

日本佛教は大體、鎭護國家、國家安康の面のみを强調し、五教の原初的性格に復古することだけは知つてゐたが、堪えず清新性を維持するために近代化することに對しては極めて怠慢であつたとは云はれまいか。明治維新を契機として、日本の近代化が急速に行はれたが、佛教は支那佛教を背景としてゐたことから、西歐的なるものの進出によつて支那的なるものゝ後退と共に、佛教もまた近代化の機會を失つて仕舞つたのである。神道の復古的力に壓迫された佛教は、世が變つても再びキリスト教の近代的なるものゝ壓迫を受けざるを得なくなつたのである。誰しもキリスト教が明朗で進步的なるに比して、佛教は陰鬱で、退嬰的であることを否まないことであらう。現在の佛教は何か隱遁的で、抹香臭いと云ふ表現が最も當つてゐるやうに思はれる。梵語の頌文はともかくとして、和讃のやうなものでも、發生當初の歡喜と愉悅とは

失はれて感ずるものは無常的な悲しい寂しさだけである。何時頃から使ひ始められたか知らないが、鐃、鉦、大鼓、木魚にしても儀式の莊嚴を思はせるより、寂寞の感が今では深い。寺院は古い傳統のみに閉ざされて、昔の人々の音感のみを傳へて、新しい音樂を儀式に用ゐようとはしてゐないのである。凡そ今日の佛教程、近代的精神を喪失したものはなからう。佛教が中世的遺物であると難んぜられ、寄生的存在視されても現狀のまゝでは、誹謗を甘受するより外はあるまい。

惟ふに彌陀念佛が初めて興起し、釋迦念佛が唱導せられた時分、支那に於ても日本に於ても、その時代精神に新なものとして迎へられたのであり、それは確に口にほとばしり出でた憧憬の聲であつた。名號を唱へることによつて身を水火のうちに投ずるも辭せなかつた程の熱情をゆすぶり起すものがあつた。然しそれが何時の間にか、生の終焉の歎聲として名號を聽くやうになつたのである。さうして佛教は緣起の惡い敎へでもあるかのやうにせられたのである。若いものは不吉な敎として佛教を毛嫌ひし、ある者は僧侶を見れば緣起でもないと云つて不淨をきよめた。一體、現代の佛教の何處に世間との親緣があるか。墓場のみが佛教の意義を許してゐるやうに思はれる。この分では佛教は行く先、益々時代との間に隔りを大きくし、宗教としての存在は抹殺される運命になるかも知れないのである。

私は今、日本佛教のこの現狀を見、その例外をなさない禪に就て云ひたい。禪は非世間的で高踏的な性格が強く、世の中との親緣を缺くと云つた點では佛教の代表的なものであらう。禪の本來は勿論然かあるべき筈でないのであるが、これが現狀佛教の例外をなさない所以なのである。この禪を眞正の姿に歸すのは――佛教全般に云はれ得るのであるが――一言にして云へば、中世的傳統を拋擲して、近代的なるものゝいぶきを持つ現實の生命體であるやうにすることである。

禪は佛教のなかにあつても、比較的に理性的で、知性的で有り、我國に於ては知識人の信仰、尙好にかなつたのである。近代化の緖口は開けてゐたやうに考へられる。禪が過去に於て、日本文化の創造に貢獻したのもその爲めであつたら

う。然し禪の新しさ、創造性と云ふものはそんなに持續しなかつた。禪がよく喧傳されたものゝ、道樂としての愛翫の對象となり、深山幽谷の佛教化して仕舞つた。近代的な性格を具へながら不思議にも後退するやうになつたのである。さうして禪と云へば、時宗の禪的修行を慕ひ、英雄の禪的修養を慕ふと云つたことになつて、徒に回顧的な所にのみ禪が見られることになつた。ある一部では時流に乘つて、日本禪と云ふことも唱えられはしたが、これも國家性全體のもつ尊大性に煩されて、これまた復古的日本禪の獨尊に終つたのである。

顧みるに中唐から五代、宋にかけて完成した支那禪を見よ。我々が今日漠然と禪を考へても、印度的禪定觀と何か相異する大きな組織を完成してゐるのである。南泉が猫を斬り、趙州が脫履を頭上に案じて出で去つたこと、黃檗の棒、臨濟の喝、或は天龍の一指頭を以てしたことなど、佛教的術語に全く拘りなく自由自在に禪を示してをり、其處には印度的なるものゝ餘臭すら留めてゐないのである。これは即ち禪がその時代に近代化してゐたことを物語るものである。江西の馬祖、湖南の石頭と云はれ、この二人を知らないものは無知の稱とまで時人の關心を引いたのも、全く禪が近代的指導性を持つてゐたからである。禪は不立文字、敎外別傳であるために、三藏の破却を行つた會昌の破佛、後周の破佛にも、その最大勢力を維持し得たと云はれるが、斯る理由は勿論存する所ではあるが、その理由の一面には禪がその當時の人々と共に生きてゐたと云ふことを忘れることは出來ないのである。宗教の衰亡は外部的權力の彈壓にあるのではなく、宗教それ自體に根ざして來る傳統の固執に基因する場合が多い。支那の禪も外部的壓迫を俟つまでもなく、元明淸と次第に因習的となり、時代的指導性を失つて、舊時代の遺物に殘る伽藍のみの禪と化するに到つたことでも明かである。

日本の現狀の禪も略ゝ伽藍のみの禪と云はれはしまいか。成程、叢林にあつては型通りの淸規が立てられ、坐禪も提唱も行はれてゐる。諸宗の寺院に較べて寺域の閑寂も保たれてゐる。然し此等のことが世間とどれだけの關係があらう

か。世間に取殘されてゐる仙境の意味しかないのではあるまいか。碧岩錄や臨濟錄の提唱が果して現實的な指導性をどれだけ持つてゐるか。嘗つては碧岩錄も臨濟錄も支那禪の生命を帶びてゐたが、今日では既に數世紀を閲した海の彼方の國の遺物ではないか。碧岩錄や臨濟錄に猶禪の生命が存すると思惟する人があるとしたならば、それは數世紀前の人でしかない。あの支那的表現に一般日本人の心底に觸れるものが何處にあらう。最近こゝ數十年の間に如何に多くの類似宗教が發生し、さうして多くの信者を擁したことを思へば、禪と云はず、今日の佛教が現實性を持たない證據で碧岩錄や臨濟錄を聲をからして講じた所で、古典としての意味は持つとしても、現代人の指導的意義を殆んど有せぬのである。殊に俗語を以つて綴つた文章は、支那人にこそ生活に訴へる親しさを覺えさせたであらうが、日本人に取つては何の關係があらうか。普通の字引にも見出せない難解な文字として却つて禪旨の理解をさまたげてゐるだけである。

江戸時代に盤珪が和語說法を提唱し、當時異端視されるまでに禪を平話化したことは確に意義のあることであつた。盤珪は漢語に對して和語といふ日本主義的意企に於て、平話化を策てたのみではなくて、禪の時代的指導性を和語說法に於て復活しようと試みたのである。盤珪は碧岩錄や臨濟錄の型通りの提唱が無意味であることを喝破したのである。盤珪の出生以前、假名法語が漢語語錄の間に混じて行はれもしてをり、漢語では親しまれ難いといふ先覺者の自覺は或程度はあつた。然し盤珪の頃になると假名卽ち和語法語でなければどうにもならなくなつてゐた。室町頃に既に唐音の法語は禪宗僧侶の間ですら理解が出來なくなりつゝあつたのである。

次に盤珪の狙ひを見逃さず、禪の一大維新をはかつたのは誰かあらう白隱である。白隱は盤珪の卑俗な和語說法に更に輪をかけた低俗說法をした。卑俗、低俗といふことは決して禪の本質を低下さしたことではない。低下は舊殼を守つて判りもしない漢語語錄を弄んでゐる人達の間に却つて存したのである。白隱の禪維新は低俗說法によつて斷行せられたので

ある。勿論、白隱の漢語語錄には高い知識によつたものが存する。然し其等の語錄は世間的意味を持つてなされたものでなく、禪の新なるものを生まうと意企して書かれたものではなかつた。白隱が自ら高僧を以て任じ、大寺院に住して衆徒の多くを擁することのみを希求したならば、成程江戸期の高僧碩德として史上に殘つたかも知れないが、禪の維新は起らなかつたのである。紫衣の高僧は何人もあつた。高僧必ずしも禪の維新を遂行した人達とは稱し得ないのである。

白隱が當時の禪に新な近代的要素を注入しようとした努力は、先づ俗歌の型に於て宗旨を示された。歌の語句の面白さは、その面白さの中に禪の新しさを蘇らしたのである。「おたふく女郎粉引歌」「主心お婆々粉引歌」「施行歌」「安心ほこりたゝ記」「大道ちよぼくれ」「子守唄」「草取唄」「善惡種蒔鏡和讃」「坐禪和讃」「孝道和讃」「寢惚之眼覺」等々は盤珪の流暢な說法にまして、容易に時人の目に或は耳に入つた。流行歌が時代の尖端を行くやうに、白隱の俗歌は其時代の尖端性を持つたと思ふ。禪の陳腐さ、抹香臭さは何處にもなかつた。白隱の內面的には禪維新は幾多の俊傑の打出に於て行はれると共に、外面禪を新な意識として大衆に示すことに於て成功したのである。若し白隱にして此の禪の近代的適應化を氣づかしめることがなかつたならば、その師の正受老人、或は愚堂の如き高僧的役割を果すに止つたであらう。白隱の偉大さは悟道の力量に就てのみはからるべきではなからう。

然し白隱の達眼をあまりにも推して、前記の俗歌が今日に於ても、禪の近代性を持つ代表的なものであると云ふことが出來ようか。それは問題は別である。今日に於ては白隱の示した近代的なるものも、既に古典的なるものと云はねばならない。禪の先輩は屢〻白隱に復古することを唱へるのであるが、今日を江戸時代に戻さうとするのであらうか。白隱以後、現代に到る間には大きな空白が出來て仕舞つてゐる。白隱の近代的性格を持つた禪が次第に近代性を喪失して、今日では全く古典としてのみ殘つてゐるものがあるだけである。黑いものが鼠色になり、やがて眞白になつたやうなものであ

る。最近でもよく「坐禪和讃」が唱えられてゐる。白隱を追慕する意圖は窺はれるが、この和讃に現代人の感覺に訴へる新しさが何處にあるか。鼠色の時代はともかく、全く空白の時代になり、近代的なものは爪の垢ほどもないであらう。若し「坐禪和讃」を通じて白隱を追慕しようとするとしたらば、白隱の意志に却つてもとり、禪を古典化することになると考へる。見臺をたゝいて凡そ時代離れをした碧岩錄や臨濟錄を講ずるのと五十步、百步である。明治維新の頃、その時分のある新聞はペンキ塗りの一社が出來たと云つて報じてゐる。このことは決して輕佻浮薄な歐化思想として笑ふべきことではない。神道がそれ程の積極性を當時持つてゐたならば、あの極端な古典化に陥らなかつたであらう。佛敎寺院が洋風の建築をし、洋風の莊嚴を施したとしても決して行過ぎではない。現在の佛敎を新生するには思ひ切り、近代性を具へることである。禪も坐禪を嚴肅に行ふ反面、新しい樂器による音樂を加味し、高座からする古典的提唱を出來るだけ少くして、雲水に東西の近代思想を講ずべきである。臨濟、圜悟の境地は西歐の碩學にも見ることが出來るものがあるのである。さうすることによつて白隱が意企した禪の近代化を更に進め、然もそれを組織的に行ふことが出來るのではあるまいか。凡そ近代的意識の乏しい枯木寒巖による底の禪僧を養育することを目的とし、新聞は讀むな、ラヂオを聽くなでは、日本軍隊が内部的に崩壞したと同樣なことになるのは明かである。日本全體に迫られてゐるものは科學化である。科學化は卽ち近代化である。佛敎のうちでも隱遁的性格を顯著に持つやうになつた禪は、一層の科學化、近代化が必要であらう。さうした根底に於て初めて、日本禪が眞に完成されるのである。我々は過去に於てあまりにも傳統の古さといふことに意義があるやうに敎へられ、古いといふことに自信を抱いてゐた。そのために新しいものを古めかしくする作爲すら用ひた。恰も目明きが好んで盲者となることを欲したやうな愚かさを犯してゐたのである。我々はこの上、夢にも原初的復古を望んではならぬ。日本禪が鎌倉時代に出來上つて仕舞つてゐるといふやうな幻想を描いて。（此稿は座談會「宗敎に就て」を司會し、及び佐藤信衞氏稿「淫祀邪敎」（知と行第二號）を讀んで感ずるまゝを書きつけたものである）。